



「サウディアラビア王国の国家形成と支配基盤：方法論的検討」

中村， 覚

(Citation)

近代, 101:89*-127*

(Issue Date)

2009-05

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001391>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001391>



「サウディアラビア王国の国家形成と支配 基盤：方法論的検討」

中 村 覚

- I はじめに
- II 国家の機能と形成過程
- III アラビア半島における社会類型とアクター
- IV 資料

I はじめに

前号における拙稿では、サウディアラビア王国の国家形成において定住民と遊牧民が果たした政治的役割を検討する課題が生じていることについて明らかにした。この課題を構成する先行研究での主な対立点は、[遊牧民対定住民・都市民・商人]、[部族対国家]、[停滞対発展]であった。この対立点に関して検証するためには、遊牧民、定住民、都市民、商人などを政治社会的なアクターとして位置づける一方、部族や中央政府の変容を明確にするモデルを構築する試みが有効である。もちろん、主な論争点に関しては、一次史料による検証の必要があるだろう。そこで本稿では、この方法論的課題に取り組む作業の準備を行いたい。

本稿は、「アクター・国家形成論(新進化論)アプローチ」という独自の組み合わせを提示する。この方法により、部族社会におけるサウディアラビア王国の国家形成に関するモデルを構築する事例研究としての成果を目指すと共に、国

国家形成論に一定の理論的な貢献を積み上げる成果も目標とする。

そこで II では、国家形成に関する紛争理論、マルクス主義、新進化論、都市革命論、長距離交易モデルについて検討を進めながら、本稿における国家の 6 つの機能と 3 段階の形成過程に関して理論的な設定を行う。次に III では、実証的な検証作業の準備として、遊牧民と定住民に関する概念を設定した後、国家形成における原動力などの役割を考察する視点について検討する。最後に IV で、資料解題を行う。

II 国家の機能と形成過程

国家形成に関する研究は、歴史社会学、人類学、考古学などで現在までに膨大な研究が蓄積されている。それらの研究史を網羅的に概説する作業は、既に国内外の研究者によって行われているものであり⁽¹⁾、本節では、アラビア半島の事例を論ずるという本稿の目的に則して、国家の機能と形成過程に関する理論的な設定を行いたい。本稿は、部族社会における国家形成に関して研究するため、F・エンゲルスの研究の系譜を継ぎながら、未開社会における国家の成立に関して検討した新進化論を主に検討する。また、アラビア半島の事例に対する新進化論の適用範囲を確定する。

II-1 国家機能の形成

マルクス主義における国家論は、国家形成に関する政治経済的な包括的な理論的枠組みを提示したものである。F・エンゲルスによる『家族、私有財産および国家の起源』は、L・H・モルガンの親族研究を発展させることにより成立した。『起源』は、ギリシャ、ドイツ、ローマのケース・スタディーとなっているが、中央政府の形成に関する議論としては、以下のような段階をあげている。

(イ)技術革新によって始まる商品生産が私有財産を生み出し、搾取階級を形成する。搾取階級は、支配階級となり、搾取される被支配階級から分化される。
(ロ)血縁関係による結合から脱却した、地域による住民の区分が発生する。
(ハ)搾取階級を保護するための警察力をもつ公権力が成立する。
(ニ)公権力を維持するための財政収入を確保するために租税の取り立てなどが行われる。
(ホ)公権力と徴税を掌握する官僚制度が成立する⁽²⁾。

中央政府の形成に必要な要因として、(ハ)の公権力(すなわち軍や警察などの強制力)の成立、(ニ)の官僚制度の成立、(ホ)の公権力(強制力)や官僚を維持するための財源の確保という3つは、どのようなタイプの国家の成立にでも不可欠な普遍的な必要条件としておおよそ受け入れられるだろう。

エンゲルスの議論には多くの批判的議論が向けられ、その後の研究発展の契機になった⁽³⁾。まずは、上記の(ロ)と(イ)にあたる、血縁集団から地域による住民の区分が発生するという図式と、階級分化が国家成立の要因となっているという議論の2つについて検討を続ける。さらに(ハ)を補足する研究として代表的であるウェーバーの正当性論を確認する。(ニ)に関連する研究として、長距離貿易に関する一軍の研究があり、以下、随時、検討する。

親族集団の間の紛争を克服するために国家形成が行われたという論点にして多くの検討が蓄積されたが、代表的なものとして、G・チャイルドによる「都市革命論」、E・R・サーヴィスによる新進化論、M・フリードによる階層社会(stratified society)論をとりあげる。

チャイルドの「都市革命論」の骨子は、余剰が生産されるようになると、その余剰が都市を出現させ、社会分化を促すことになり、国家を出現させることになるという議論である。余剰の生産は、人口の増大をもたらし、それによっ

て出現する都市には専門的職業集団が現れる。都市には、職人や商人だけではなく、国家の支配階層を担うことになる、聖職者、文民官僚、軍人、政治的リーダーも出現することになる。支配階層の間には、余剰の篡奪をめぐる紛争が発生するが、それが国家の形成によって抑制されると考えられた[Childe 1950]。

アラビア半島を論ずる本研究では、「都市化」というよりは「定住化」に焦点が当てられることになるが、国家の支配階層を担うことになるウラマー、文民官僚、軍人、政治指導者の出現という観点が重要となる。

サーヴィスやフリードなどは、新進化論の立場から議論を展開している。新進化論の研究史上の起源は、19世紀後期に現れた進化論者たち、モーガン、エンゲルス、H・スペンサーなどの議論を洗練させる試みであった。新進化論は、19世紀末にF・ボアズなどの反進化論者によって批判された議論を克服しようとしたものだったとも言えるだろう[サーリンズ 1976: 1-5]。

フリードは四段階を想定したが、サーヴィスは五段階の発展段階を想定した。フリードの四段階は、平等社会(egalitarian society)、ランク社会(ranked society)、階層社会(stratified society)、国家(state)だった。サーヴィスの五段階は、バンド社会(band society)、部族社会(tribal society)、首長制社会(chiefdom)、未開国家(primitive state)、現代の民俗国家(folk society)だった。サーヴィスの議論では、バンド社会は、数十名程度の狩猟採集民から構成される親族集団である。部族社会とは、農耕や牧畜を営みながら、離散と集合を繰り返す親族集団の集合である。首長制社会の政治形態は、中央政府の萌芽(central direction)や継承によって保持されるハイアラーキーな地位の階梯を備えているが、強制力の合法的な独占は達成されていない段階である。また、彼によれば、どの首長制社会も神権政治であるという[Service 1975: 16]。国家の普遍的な定義としては、強制力の合法的な独占によって成立していることが指摘されている[Service 1975: 15]。フリードとサーヴィスの議論の比較についてサーヴィスは、フリードの「平等社会」はサーヴィスの「バンド社会」

と「部族社会」に相当し、同様に「ランク社会」は「首長制社会」、「階層社会」は「国家」に相当すると指摘している[Service 1975: 44]⁽⁴⁾。

フリードは、平等社会では、階級分化は、富裕者と貧者の間に発生するのではないという。親族集団が基盤となっている社会での紛争や対立を解消するために、非親族的な抑圧手段が形成され、それが強化されることによって、段階を経て国家が形成され则认为している[Fried 1967: 225, 235]。

サーヴィスは、階級分化が国家形成の要因として不可欠であると論ずるエンゲルスの議論に対し、商品生産の拡大や私的財産の形成過程に引き起こされる、資本家と労働者という階級分化は、国家が成立するための前提条件とはいえない、と批判した⁽⁵⁾。

サーヴィスは、どの段階の社会においても不平等や格差は、存在するものであると考えている。たとえバンド社会などの最も単純な社会であっても、指導者として行動するメンバーが定期的に必要とされることをその根拠としている。社会の中に、継承などの制度が確立して政治的指導者が恒常的に存在するようになると、首長制社会が形成されるという。首長制社会の政治的リーダーは、商品の蓄積と再分配という役割によって社会を統合しているという。国家は、強制力を独占的に使用することが可能となることにより、首長制社会の不安定さを克服した持続的な政府が成立した状態であるという[Service 1975: 290-308]。首長制社会の政治的リーダーは、安定的に存在するという特徴があり、商品の蓄積と再分配という役割による社会統合機能が見られると指摘している。

以上に議論してきたチャイルドや新進化論による議論は、モーガンやエンゲルスによる研究を克服しようとしてきたのであるという点を共通項としてもつと指摘できるだろう。ただし、それゆえに、というべきか、「都市革命論」や新進化論は、モーガンやエンゲルスと共通の枠組みの中にある。チャイルドは、余剰生産が階級分化を促して国家形成を可能としたという枠組みで論じている

点では、マルクス主義国家論と共通している。新進化論の起源について遡ると、マルクス主義国家論と同じく、モーガンをその研究史上の起源としているという共通性があることにも気付く。

マルクス主義国家論、都市革命論、親進化論などは、中央政府の成立要件として、公権力(強制力)の確立、租税などによる財政収入の確保、官僚制度や行政の成立、政治的リーダーの確立と統合機能の強化という4つの論点について、理論的な枠組みを洗練させてきたのだといえるだろう。

公権力(強制力)の確立に関連する議論であるが、M・ウェーバーは国家を「物理的強制力の正当な独占」と定義している[Weber 1978: 904]が、これは現在でも最も普遍的に使用されている国家の定義であるといっていよう。ウェーバーは、国家の形成の段階として、「強制力の独占」と「その正当化の様式」に関する議論を展開した。

ウェーバーは、国家が強制力を独占する過程の第一段階として、「戦士結社(warrior fraternity)」の形成に着目した。職業的戦士集団である「戦士結社」が、長期にわたって存在する領域的共同体において、その経済的利益や成員の権利を防衛する働きをするようになったとき、その政治共同体は物理的強制力の正当な独占を達成する。M・ウェーバーはいくつかの事例をあげているが、「物理的強制力の正当な独占」が、親族集団とは異なる政治組織である国家の特性であると論じた[Weber 1978: 904-910]; [古賀 1973: 143-160]。また、ウェーバーは、支配が正統性を獲得する様式として「カリスマ的支配」、「伝統的支配」、「合法的支配」という3様式を提示した[ウェーバー 1960: 32-59]ことで知られている。

ウェーバーの「戦士結社」論は、軍事集団の結成が中央政府の成立の契機となったという「紛争理論(conflict theory)」の一つであると位置づけられている⁽⁶⁾。類似した理論として、征服活動が国家形成を可能としたと論ずる「征服説」を唱える研究が数多く蓄積されているが⁽⁷⁾、征服活動の遂行の結末は、必

ずしも中央集権的な政府の樹立には結びつかない点が指摘されている[ローウィ 1973: 18]; [クレイダー 1972: 100]。

ウェーバーの議論は、下部構造を重視したマルクス主義へのアンチテーゼとして上部構造である正当性の問題を提起したことがよく知られているが、アラビア半島の事例でも、正当性の問題を無視することはできないと言える。特にサウディアラビアでは、ワッハーブ主義イスラームによる正当化機能は無視することはできない。

以上のような、軍事、財政、中央官僚、政治的リーダーに着目する枠組みを乗り越えようとする、研究の潮流として、西村正雄が紹介している H・T・ライトの議論をとりあげる。ライトは、情報処理や社会の制御システムとしての行政の能力の向上に着目するべきであると提唱している。彼は、サービスの議論が、部族社会から首長制社会への移行の問題に力点を置きすぎていると考え、首長制社会から国家への移行の問題についてより多くの議論が行われるべきであると主張した。

そこでライトは、中央政府の形成の要因については、集団、制度、役割などよりも、政治における意思決定過程や社会的制御などの問題について目を向けるべきであると提唱した。ライトの主張は、情報の流れの制御やその戦略に着目する生物学のサイバネティックス理論をモデルとしている。

彼によると、どのように情報が形成され、流通し、政治的意志決定がなされるのかというパターンに着目すると、首長制社会と国家では、情報の制御のためのパターン、戦略、ハイアラーキー構造、意思決定過程などに相違がみられるという。彼は、首長制社会と国家の間にそのような差異が生じるメカニズムに着目すべきであると考えている[Wright 1977: 380-381, 383, 395]。

ライトによって提唱された、行政による情報制御に関するメカニズムを研究するべきであるという視点は、長距離交易モデルに適用されている。長距離交易モデルには、文化伝播主義アプローチとシステム論的アプローチの二つがあ

るが、ライトの議論の流れを継ぐのは、システム論的アプローチの方である⁽⁸⁾。システム論的長距離交易モデルでは、行政機構は、能力を向上させたことにより、長距離交易を制御することが可能となる。そして長距離交易の活発化が、社会の複合化や国家形成をもたらすという。

長距離交易モデルでは、長距離交易という、新しくて大きな「情報量の増大」に対応できる能力を行政がもつことによって、それを利用した国家形成が可能となるという。行政能力が向上した理由は、社会文化的な複合性の増大であるとされる。能力が向上した行政機構は、貢物や税の徴収を一つの手段として、交換される交易品の数量や種類を制御することにより、できるだけ社会の階層化を促し、生産力を増大させようとする。生産力の増大は、それに対応するために行政の一層の分節化を促すようになるという[西村 1996: 204-211]。

首長国から国家への移行の段階において、意思決定過程や社会的制御が重要であるという指摘は、検証に値する。特に、「情報量の増大」を制御する機能の強化が重要であるという見解は、国家形成論では独自の意義があると言えるのではないか。サウディアラビア王国の形成過程における場合でも、首長国から国家への移行過程で、長距離交易の発生に伴う特殊な機能が発達したと言えるのか、検討課題となる。

なお、本稿では、先行研究ではほとんど取り上げられてこなかった、国際関係を処理する「外交業務」の制御の問題についてとりあげることになる。先行研究では、部族社会や首長制社会の中央政府が直面していた「対外関係(External Relations)」としてとりあげられてきたのは、他の部族や首長との間の確執や戦争を処理する方法のみであった[サーヴィス 1979: 61]。地域の外から現れる大国や異文化社会との外交関係を処理するための方法や組織の変化については、20世紀の国家形成の事例となるサウディアラビアに特殊な検討項目と言えるかもしれない。

先行研究では、サ우드家が、サウディアラビア王国を形成することに成功

した要因としては、「異文化をもつ列強」、英国との外交関係の構築に成功したことが明らかにされている[Goldberg 1986]。サウード家は、英国人とは、地域での部族や首長との間に同盟関係を構築する場合とは、異なる方法で関係を築きあげなければならなかった。コミュニケーションは英語で行われなければならなかった。英国人がキリスト教徒であるからといって、「異教徒」扱いすることはできなかった。英国に対して、戦争、政略結婚、パイア(忠誠)の誓いなどのアラブ人の政治的手法で関係を構築することは不可能だった。

本稿では、史的唯物論や新進化論などで論じられてきた、軍事、財政、政治的リーダー、行政という4つの論点に加えて、ウェーバーが指摘した正当性、さらにライトによる情報や外交の処理の問題に関する観点を取り入れて、国家形成のために必要とされる6つの機能について検証することとする。

II-2 国家形成の過程に関する比較範囲の確定

本項では、第一次サウード朝からサウディアラビア王国の成立までの期間に関して、新進化論の政治的發展過程説が比較可能性をもつのか、検討しておきたい。

第一次サウード朝は、遊牧部族集団の間の紛争を抑制する政治機構として成立したという点では、フリードが論ずるように親族集団の間の紛争を抑制する、非親族的手段という枠組みと類似している。だが、フリードの4段階説は、中央政府の形成という問題よりも、階層分化の問題に焦点を当てている。アラビア半島の事例では、脱親族化という社会的変化が首長制社会や国家の形成と相關したとは言えるが、フリードが論ずるほど明白には立証しにくい。という理由は、サウディアラビアの「部族解体」は、建国後にもわたって続いた長期的な過程であったからである。そこで本稿としては、サーヴィスの議論についてさらに検討を加えたい。

サーヴィスによると、E・E・エバンス=プリチャードや M・フォーテスは、政治的發展段階の「タイプ」を論じているだけである。一方でサーヴィスは、自分は政治發展の「過程」を論じていると位置づけている[Service 1975: 69]。

1940 年にフォーテスとエバンス=プリチャードが編者となった『アフリカの政治システム』は、「中央政府なき社会」と「中央政府がある国家」に政治組織を分類した⁽⁹⁾。フォーテスとエバンス=プリチャードは「二段階説」を提示していたと要約することもできるだろうが、サーヴィスは、この「二段階説」について、単なる「段階」を類型化しただけであり、両者の間の發展をもたらす要因について検討が行われていないと批判したのだった。

だが、サーヴィスの理論もまた多くの批判的検討を受けることとなり、多くの課題を残していると考えられる。サーヴィスの理論への批判は、その最も多くが、「実証不可能」であるともいえる石器時代のバンド社会の構造や、バンド社会から部族社会への移行の問題に集中している。フリードは、石器時代の「バンド」と部族社会の「家族」には相違があるのだろうかという疑問を投げかけている[フリード 1982: 142]。そもそもエンゲルスは、部族社会の中に私有財産が発生することにより、家族が発生すると議論していた[エンゲルス 1999: 162]。M・ゴドリエは、部族社会が、石器時代から發展したという理論については実証が不可能であると指摘している[ゴドリエ 1976: 141]。

また、サーヴィスの新進化論は、バンド社会から部族社会への移行に関する実証だけではなく、部族社会から首長制社会への移行の実証においても問題を孕んでいるのではないかと考えられる。というのは、サーヴィス自身が以下のように述べているからである。

首長制社会の発生をじっさいに観察したものは、誰もいない。けれども、さまざまな發展度合の首長制社会について良質の民族学情報が存在しているので、再分配の発生を選択する諸条件を想像することは、とくに困難ではな

い[サーヴィス 1979: 125]。

ゴドリエは、新進化論の実証方法について、彼らの理論的枠組に適合する都合のよいデータだけを収集したのではないのかと厳しく指摘している。「社会の機能作用の目に見える特徴をひろい集めて陳列し、ついで比較定点として選ばれた諸特徴があるかないかにもとづいて、諸社会を諸概念のもとに再編すれば、社会分析が終わったとする傾向をもっている」[ゴドリエ 1976: 157]。ゴドリエは、サーヴィスの枠組みは、「諸社会の現実的進化の分析結果から出発して構築されたのではなく」、「生物の進化の研究から引きだされた」モデルを援用しながら論理的に組み立てられたものにほかならない、と指摘している⁽¹⁰⁾。

サーヴィスの議論のデータは、以下のように収集されているとまとめられる。石器時代であるとされるバンド社会については「想像」あるいは「理論的な推測」である。また、部族社会や首長制社会については、現代世界の各地に存在している「部族社会」や「首長制社会」に関するフィールド調査によってもたらされたデータである。未開国家の起源については、考古学による様々な発掘調査の結果をもとにして構築された「理論的なモデル」を用いて階級構造や行政について議論している。また、民俗社会については、現代の「民俗社会」に関するフィールド調査の結果からデータを引きだしている。以上の結果からは、サーヴィスも、かつての進化論が陥った、「部族社会」や「首長制社会」に関しての「進化の証明不能の罌」に陥り、ふぞろいな実証データを継ぎ接ぎすることによって、論理を構築していたのではないのかと指摘できる。

ただし、このような論証の方法がとられた理由として考えられるのは、サーヴィスが、「特殊進化」と「一般的進化」について明らかにするという研究史上の成果をあげることを意図したためではないかとも考えられる⁽¹¹⁾。

いずれにせよ、国家形成の政治変容「過程」に関する研究は、実証が容易ではないという難題を抱えている。新進化論は、歴史的な検証手続きがより厳密

になされることにより、さらに洗練された理論となる余地を残していたのではないだろうか。本稿は、その試みとなる。

歴史社会学の中では、絶対主義国家論、都市国家論、国民国家の形成などに関する議論が行われてきた。だが、部族社会における国家形成の過程に関する研究は、必ずしも歴史的データが人類学や政治学と接点を持つ観点でモデル化されてきたわけではないだろう。

キレナイカのサヌーシー教団に関するエバンス=プリチャードによる研究は、植民地勢力による国家形成の事例であると言えるが、歴史的な叙述に終始しており、政治構造の発展に関する分析であるとはいにくい[Evance-Prichard 1940]。嶋田義仁によるフルベのイスラーム王国に関する研究は、部族社会における内発的な発展の過程について人類学的な視点に基づいて行われた本格的な研究としてあげられるだろう[嶋田 1995]。政治学者のアンダーソンは、リビアとチュニジアにおける 1830 年から 1980 年までの国家形成の過程について、行政機構や社会組織の発展に着目しながら議論した過程分析となっている[Anderson 1986]。

サウディアラビア王国の国家形成過程は、史料上の制約を有するとはいえ、部族社会における国家形成という新進化論的仮説に関して「実証的に対照が可能な」事例である。歴史上、20 世紀に入るまでナジュドでは「国家」が形成されたことがなく、「部族社会」や「首長制社会」のままにおかれていた。また、植民地化された経験をもたないままに、内発的に国家形成が行われた地域であった。

本稿では、サーヴィスの議論のうち、バンド社会と現代の民俗国家という立証不能な段階を検討の対象外とすることにして、部族社会、首長制社会、国家の 3 段階の枠組みをサウディアラビア王国の形成過程に適用するものとする。そして、その 3 つの発展段階への移行を可能とした政治社会的な要因を、第 1 項で提示したように、政治的リーダー、強制力、財政、官僚、正当性、情報・

外交の6つの観点から、検討するという枠組みとなる。

第一次サウード朝以前のアラビア半島中央部は、「部族社会」であったと位置づけられる。遊牧や農耕に基づく部族や、農耕や商業に基づく村が存在していたが、複数の遊牧部族が政治的にも軍事的にも優位に立っていた社会であった。また、平等主義的な価値観をもつ部族集団は、政府の形成が可能となるような富の蓄積を進めなかった。

第一次サウード朝(1744/5年～1818年)は、「首長制社会」が成立した段階であったと考えられる。「首長制社会」とは、一応の中央政府をもつが、持続的で安定的な「強制力の正当化された独占」を達成しなかった段階である。サウード家の支配は、アラビア半島中央部における中央政府を樹立したが、最大領地を獲得した後、わずか10～20年という短期間で崩壊した。

第二次サウード朝(1820年～1889年)は、依然として「首長制社会」の段階にあったと考えられる。第一次サウード朝時代に構築された行政機構を再興する試みが続いたが、地方都市や遊牧部族の抵抗や、周辺首長国を打倒することはできなかった。このため、「国家」の段階には達しないままに、再び崩壊した。

また、「負事例」となる対照事例として、第二次サウード朝時代にナジュドで一定の発展を遂げたガシームとラシード朝(1836～1921)という二つの首長制社会をとりあげる。ガシーム地域のブライダとウナイザの両都市は、長距離交易の拠点として発展したが、軍事的な発展は見られなかった。また、ラシード朝は、第二次サウード朝のライバルに成長し、第二次サウード朝を滅亡に追い込んだが、第三次サウード朝によって滅ぼされた。これら二つの事例に関する検討を研究計画に加えることにより、現在からの視点で首長国や国家の形成に関して省察するばかりではなく、過去から未来に向かう視点での検討も担保されるだろう。

サウード家は、1902年から1932年の建国期の間に、「首長制社会」から「国家」への発展を達成することによって、サウディアラビア王国が成立した。第

三次サウード朝の中央政府は、商人や「外国人行政官」の能力を活用することにより、財政、情報収集、行政の能力を改革することに成功した。また、遊牧民を定着化させるイフワーン運動が始められたことを契機として、遊牧部族がサウード家の支配下におかれ、中央政府は軍事力の独占を達成した。また、支配イデオロギーであるワッハーブ主義は、遊牧部族や、新たな征服地ヒジャーズなどにも浸透することに成功した。

本節での議論をまとめると、サウディアラビアの国家形成に関する本研究では、「部族社会」として第一次サウード朝の以前の時代、「首長制社会」として第一次サウード朝と第二次サウード朝の時代、「国家」としてサウディアラビア王国の時代を仮定する。また、中央政府の機能として、政治リーダー、強制力、行政、財政、正当性、情報・外交を設定し、各過程において、それらの五つの機能がどのように変化・強化されたのか、検証する。

III アラビア半島における社会類型とアクター

前節では、新進化論に対する批判として実証問題が生じていた点が指摘された。本節は、国家形成論を実証的研究とするために、政治社会構造の変容過程の中に、アクターに関わる観点を組み込むことにより、実証作業とモデル構築作業を架橋する。

アクターとは、一般的には行為主体を意味するとしても、政治研究では政治主体として捉えられる。アクターは、個人として設定されることもあるし、団体、政党、国家などの集団を設定することもある。

本研究では、史料の制約の範囲で、アクターについて、その形成の段階から論じられることとなる。すなわち、定住地、支配者、商人についてそれらの出現から論じ始め、中央政府の形成の過程で果たした役割を考察することとなる。アクターについて意識的に検討を進める認識上の利得は、先行研究における曖

味な論点や論争点に関して、明確に記述することが可能になることである。

以下、本節では、まず定住民と遊牧民の概念を検討する。次に、「支配者」と「被支配者」の二項分類を見直して、役割概念を導入する。さらに、国家形成の原動力に関する観点を導入する。

III-1 定住民と遊牧民

本項では、アラビア半島中北部における社会類型として、定住民と遊牧民の概念に関して検討し、明確にしておく。

建国期までのアラビア半島の社会構成では、住民は、「バドゥ(بدو)」(ベドウィン bedouin)」と「ハダリー(حضرى)」という分類が最も重要な区分であった。「バドゥ」と「ハダリー」という概念は、それぞれ多義的であり、ここでは慎重に概念を設定しておきたい。ベドウィンには、「遊牧民(遊牧ベドウィン)」という訳語をあてる研究と「田舎の民(定住ベドウィン)」という訳語をあてる研究がある。他方、ハダリーに関しては、「定住民(settled people)」という訳語をあてる研究と「都市民(city people)」という訳語をあてる研究がある。

片倉もそこは、ベドウィンを「砂漠の民(desert people)」と位置づけた上で、ワーディー・ファーティマのベドウィンは、遊牧ベドウィン(nomadic Bedouin)、半遊牧ベドウィン(semi-nomadic Bedouin)、村や集落に定住するベドウィン(settled Bedouin)の3種類に分類した [Katakura 1977: 28-31]。

片倉は、ベドウィンを「砂漠の民」と位置づける一方で、砂漠の村や集落に「定住する」ベドウィンがいると指摘しているのである。つまり、遊牧民=ベドウィンとは定義されていない。また、ハダリーについては「都市民(city people)」と翻訳した。

なお、アラビア半島では、「バドゥ」という概念は、それについて語るものによって強調点に変化する点が指摘されている。「遊牧民」は自分たちの遊牧とい

う生活形態を「ベドウィンの中のベドウィン」であると誇りに感じる一方で、半遊牧民を蔑視して「ベドウィンではない」と見下していた。だが、「都市民」は、半遊牧民や田舎の定住民さえ、「バドゥ」と見做していたのである[片倉 1992: 204]。また、それだけではなく、遊牧民にせよ、半遊牧民にせよ、田舎の定住民にせよ、「ベドウィン」は、ときに遊牧的生活様式を送り、またあるときには定住化した生活様式を送っていたこともあり、誰が「ベドウィン」だったのかを確定することは決して容易な作業ではない。

イブン・ハルドゥーンの『歴史序説』を翻訳した森本公誠も、片倉とほぼ同様の訳語を使用している[イブン・ハルドゥーン 1979: vol.1: 11, 235 など]。片倉や森本が行った定義に従うと、「定住民」は、「都市民」と「村やオアシスなどに定着しているバドゥ」の二種類の社会集団に分類されることになる。森本によれば、イブン・ハルドゥーンは、「田舎の住民(badw)」は、「都会の住民」とは生活形態において区別される点を指摘しているという。「ハダリー」には、「文明人」というニュアンスがあると知られているが、生活形態に関する指摘は重要な点である。

まとめると、日本語で「定住民」と訳されるアラブの概念には、「砂漠の田舎に定住するバドゥ(ベドウィン)」と、都市化・文明化した「ハダリー」という二種類があることとなる。この二つは、どのように史料の中では、区別することができるだろうか。アラビア語の概念では、「砂漠の田舎に定住するバドゥ(ベドウィン)」、「遊牧ベドウィン」、「半遊牧ベドウィン」を分ける表現は、もともととは見あたらず、すべて「バドゥ」で表現される。だから片倉は、英語の学術的用語での概念化を行ったのではないかと考えられる。森本は、『歴史序説』の文脈を読み解くことにより、バドゥを「田舎の住民」と「遊牧民」を訳し分けることができたと考えられる。

実証研究を進める本稿の観点から生ずる問題は、史料の中である地名が現れたときに、それが「村」なのか「オアシス」なのか、「バドゥ」が住むのか「ハ

ダリー」が住むのか、判断するための全く情報が無い場合にしばしば直面することである。

アラブ人研究者の M・サービルは、ベドウィンが「定住」する行為について、アラビア語の概念では、まずは「タウティーン(توطين)」として定義している。タウティーンについては、タフディール(定住化、文明化)、イスティクラール(استقرار安定化)、タスビート(تثبيت固定化)と言われる場合もあると指摘する[صابر1986: 49-50]。

しかし、アラビア語の年代記では、ある場所から移動して他の場所に住み始めることについては、「住み始める」(يُستقرあるいはالنزل)という動詞が使用される。誰かが住み始めたとしても、定住したのか、すぐに土地を離れたのかについても、特定しないニュアンスである。住み始めた場所がその後に定住地となったり、発展したのかは、歴史的な記述をさらに収集することによってのみ、判明すると言える。

そこで本稿は、「定住民」が居住する空間について、以下のように明確に、「都市民」、「大きな定住地」、「定住民(小さな定住地)」という類型を設定する。

先号の前稿でとりあげたサウディアラビア人の歴史研究者たちによる研究は、実は、アラビア半島の変化について、都市的(urban)性格を帯びると述べていた研究[Nuaim 1987][Dakhil 1998]と、定住民的(settled)性格であると位置づけている研究[Juhany 1983][Freih 1990]に分かれていた。

しかし、本稿で扱う期間では、アラビア半島の定住地のほとんどは、「都市」と呼ぶには、人口規模が小さすぎたと言えるだろう。18 世紀末、中東の主要な大都市のおおよその推定人口は、イスタンブール 60 万人、カイロ 26 万人、ダマスカス、アレppo、バグダードが 10 万人だったという[店田 2002: 680]。他方、アラビア半島では、1916 年頃にメッカ(مكة المكرمة)が約 7 万人[Hogarth 1917: 32]、メディナ(المدينة المنورة)が約 3 万人[Hogarth 1917: 27]、ジッダ(جدة)が約 3 万人[Hogarth 1917: 29]、1918 年にフーフ(هوف)は約 3 万人[Philby 1922. vol. 1:

27]、1910 年代後半にリヤード(الرياض)は 1 万 5 千人以上だったと見られる[الهطلاني 1996: 306]。人口によってアラブ世界の大都市と比較すると、アラビア半島の定住地は、全般に小規模だったのである。メッカは「都市」と呼んでもよい規模であったが、その他の定住地は、「大きな定住地」と「小さな定住地」と呼ぶのが適切であろう。

本稿では、具体的に定義する方法を採用する。本稿における都市とはメッカである。また、「大きな定住地」とは、リヤード、ブライダ(بريدة)、ウナイザ(العنيزة)、ジッダ、メディナ、フーフの 6 箇所を指すものとする。「大きな定住地」の基準は、人口規模が 19 世紀後半から 20 世紀初めに 1 万人を超えていて、地方の中では大きい規模であり、局地的な(local)政治において中心となる定住地だったと判断できるからである。また、以下でさらに検討するが、「小さな定住地」より高次の職業分化が確認されること、およびに複数の種類の住民が混住していたことを定義とする。ウナイザは 19 世紀後半に人口は約 1 万 5 千人[Altorki 1989: 20]と見られ、ブライダも約 1 万人には達していた[البري 1986: vol. 1: 124]。

「都市」と「大きな定住地」以外の定住民が住む地域は、全て「小さな定住地」とする。サウディアラビアに公式の行政組織が発生する以前には、「村」や「町」や「オアシス」といった区分は、それぞれの歴史記述者の主観的な観点によって与えられていたとも言える。本研究者がそれらの記述に一律の基準に基づいた分類を与えることは不可能であるため、すべて「小さな定住地」と定義することにする。

ただし、イフワーン運動が建設した定住地は、「フジャル (ヒジュラ) (pl/sg)」と呼ばれていたものでそれに準ずることにする。

アラビア半島の遊牧民は、おおむね 1 年のうちの約 7 ヶ月～8 ヶ月を遊牧生活で過ごすほかに、真夏の約 3 ヶ月半～4 ヶ月半は井戸の周辺で生活していた[Dickson 1936: 50];[コウル 1975: 55-56]。また、半遊牧民は、平均的には、

1 年の中で春の約 2～3 ヶ月を遊牧に費やす他は、テントや家での定住生活を送っていた[Shamekh 1975: 140]。さらにある一つの部族集団が、集団全体としては遊牧部族の生活を保持していたとしても、個人レベルでは、その一部が定住生活を開始したり、あるいは定住生活をしていたものが遊牧生活に回帰したりする現象は、「資料では追跡しきれない」絶え間ない変化である。

しかしながら、アラビア半島に関する史料の中でどのような社会変化が記録されているのかをまとめると、短期間で変換される生活様式の変化とは位置づけられない、長期にわたる歴史的変化として定住化の傾向が明らかにされる。

部族社会における国家の形成について論ずる本稿では、住民が、部族社会的な政治形態を形成していたのか否か、という点が最も重要な観点となる。本研究が扱う時代と地域の中で「都市」と「大きな定住地」の定義として、定住地の内部は、部族社会的な政治形態「分節システム」ではない原理で成立していた、という条件を追加する。「分節システム」については、後の稿で検討したいが、ここでは、史料において「分節システムではない原理で成立していた」定住地と判断する基準として、(1)支配一族、ウラマー、遠隔地貿易の商人、農民、軍人という 5 つの職業分化と、(2)複数の部族の起源を持つ定住民の混住、の二点が確認されたもの、としておく。あるいは、(3)アラブ人以外の居住や、異なる宗派の混住が確認できるものとしたい。(3)は高次の基準で、(3)が確認できる定住地は、(1)と(2)の基準は満たしていた。メッカ、メディナ、ジッダでは、アラブ人以外にも、インド人、ペルシャ人、黒人、クルド人、ユダヤ人などが居住していた[Hogarth 1917: 27, 29, 32]。フーフでは、スンナ派とシーア派の住民が住み分けていた [لوريمر n. d.: 859]。リヤード、ブライダ [الريدي: 1986]、アナイザ [Altorki 1989: 20] では、複数の部族に起源を持つ定住民が混住しており、職業分化が見られた。

「小さな定住地」は、その内部構造について、史料にその詳細が現れないような場合が多い。けれども、一つの部族集団のみがそこに住んでいたり、異な

る部族集団が住んでいたとしても、一つの部族集団が多数派となる場合が多く、すなわち「分節システム」が支配的だった場合がほとんどだったのではないかと考えておく。この推測は、小さな定住地について、仮定をおいてしまうこととなるが、おおむね当てはまると考えられる。

「定住地」や「フジャル(ヒジュラ)」では、次第に分節システムの作用が減退し始める過程におかれる。たとえ「田舎のバドゥ」であっても、アラビア半島では、定住化したこと自体が、部族的な集団構造が解体される兆候として認識されるが、部族の解体が長期的な趨勢となるには、多くの条件が必要だった。

本稿では、「遊牧民」は、部族的な政治形態を有していたと考えられるかぎり、「遊牧部族民」として言及される。それは、本稿の分析目的からは、「部族」を形成する人々の生活形態としての「遊牧」が重要視されるからである。逆に言えば、部族的な政治形態を構成していなかった遊牧民については、本研究上では、研究対象として重視していないということができる。

III-2 支配基盤、アクター、役割

前項では、大きな定住地とは、支配一族、ウラマー、遠隔地貿易の商人、農民、軍人という5つの職業分化が見られる定住地であると定義した。本研究では、5つの職業分化が果たした役割を検証する作業を行うこととなる。

前節でとりあげたように、史的唯物論の議論に対しては、階級分化に関する単純な見解は国家形成の前提とは位置づけられないという批判が加えられていたと言える。サービスは、首長制社会の政治的リーダーの確立を指摘し、フリードは階層分化が国家形成の契機となったと論じている点では、マルクス主義的国家論を洗練させたともいえ、類似する枠組みを共有していたとも言えた。

政治分析において、「支配者(ruler)」と「被支配者(ruled)」という概念は、どこまで有用だろうか。本研究のケースでは、「支配者」と「被支配者」という

二元的な区分をもうけることは、自動的に実証される概念化の方式にはならない。ある国家の領域の中におかれている、ほとんどの社会階層は、「支配される」一方で、その「国家の支配の成立を可能とする」「中間的な社会階層」としての役割を果たしていたからである。

絶対主義国家に関する研究の成果は、絶対主義国家では、王と最下層の臣民の間に多くの種類の「中間的な社会階層」が存在して、絶対主義の官僚制度を支えていたことを明らかにしている[二宮 1979: 191-217]。これらの「中間的な社会階層」は、「支配される」一方で、「国家の支配の成立を可能とする」ような役割を果たす典型的な例であろう。

農民を例にとっても、それを「搾取されている」と位置づけるばかりではなく、視点を変えれば、「貢納を収めたり」、「戦士として動員される」などの政治的役割を果たすことにより「支配を支えていた」と位置づけることができる。実際のところ、農民は、首長制社会や国家の臣民となることにより、外敵による略奪から保護されるようになるという物理的な恩恵を受け始めたのであり、抑圧的に「支配されていた」という一面だけを考えると見誤る点を生ずることになる。

本稿は、エンゲルスに端緒を持つ理論的發展の恩恵を受けているが、基本的議論とはいえ、「階級」の議論には、いくつかの難点があることを念のため確認しておきたい。一つ目に、階級意識の問題である。現在では、「階級」と「階層」という概念の使用法では、相違が曖昧になっているという指摘もある[今田 1998: 118]が、ある「社会階級」ないしは「社会階層」が、「階級(階層)」としての覚醒された意識をもつということは自明ではないし、ましてや統一のとれた政治集団としての団結行動が行われるのかということも、自明ではないと考えられる。

二つ目に、ある集団が国家の中で重要な政治的役割を担っていたからといって、その社会階層を構成する全ての集団や個人が、支配体制の中で重要とされ

ていたということは自明ではない。ある社会階層の中のごく一部のみが、中央政府の中での意思決定に関与している場合がありえる。例えば、ナジュドの「遊牧民」の全てが、同じ役割や程度で国家の中で政治的役割を果たしていたわけではない。

三つ目に、中央政府を支える社会集団は、支配の規模が拡大するにつれて多様となる。そこで、どの社会階層がどのような政治的役割を担うのかということを一義的に定義することは、ますます慎重さが求められることとなる。

以上のように、「階級」、「階層」、「支配者/被支配者」という概念のサウディアラビアへの適用には留保を伴うことから、本稿では、支配を支える「支配基盤」という概念を導入する。本稿で使用するところの「支配基盤」という概念は、国家を支えていると同時に支配されている、多様な社会集団をさすこととしたい。

III-2 中東の部族社会における国家形成の原動力

本項では、中東の部族社会における国家形成を可能とする支配基盤について、先行研究の議論をまとめることにする。成立した首長制社会や国家の中では、多様なアクターが機能や役割を果たしているとしても、国家の形成を促すアクターは、誰なのだろうか。国家の形成を促す役割を果たすアクターを「国家形成の原動力」とする。以下、国家形成の原動力に関する「征服説」と「商人資本説」について検討する。

中東の部族社会における国家形成に関しては、P・S・ホウリーとJ・コスティナーが編者となった『中東における部族と国家形成』が著されている[Khory & Kostiner 1991]。この著作は、人類学者、歴史学者、政治学者によって、中東の部族と国家の関係に関して多角的に検討が加えられている。同著の中でとりあげられている遊牧部族民と都市民の役割の分化に関する議論は、数名の著者

が言及したイブン・ハルドゥーンの議論と[Caton 1991: 85-90]etc.、イブン・ハルドゥーンのアサビーヤ論を批判した I・M・ラピダスの議論があげられる。

14 世紀のイブン・ハルドゥーンによる『歴史序説』は、砂漠の民と都市民の関係の変化から、国家の盛衰に関する循環論を議論したとして知られている。彼の議論では、住民は、砂漠の民と都市民に分類されるが、砂漠の民が、信仰心にも支えられた「アサビーヤ(عصبية)」を形成すると、強力な軍事力となり、征服活動を開始する。そして遂には都市を拠点とする国家を征服して、新たな国家を形成することになる。ただし、征服活動を終えた砂漠の民は、都市に支配拠点をおく社会集団へと変容し、その間に「アサビーヤ」を喪失して、遂にはかつての屈強さを失ってしまう。このために国家は、次に現れる新たな遊牧民の「アサビーヤ」によって滅ぼされ、新しい国家が出現するという。

イブン・ハルドゥーンは、「アサビーヤ」による征服運動が国家形成の主因となると論じた。アサビーヤについて、森本公誠は「連帯意識」という訳語をあてている[イブン=ハルドゥーン 1979]。宮地美江子は、イブン・ハルドゥーンが論ずる「アサビーヤ」とは、「血縁集団もしくはこれに類した集団のうちにみられる相互の愛情とお互いのために喜んで死ぬ意識」であると述べている[宮地 1987: 148]。

イブン・ハルドゥーンは、「アサビーヤ」には、血縁関係、主従関係、盟約関係などの複数の種類があると論じている。征服活動をもたらす「アサビーヤ」は、血縁関係であると述べ、最も強い結合は血縁である言うが[イブン=ハルドゥーン 1979: vol.1: 250, 762]、「アサビーヤ」とはいかなるものなのかについて一義的に明確にされているわけではない。

ラピダスは、イブン・ハルドゥーンが論じた「アサビーヤ」を「部族的連帯(tribal solidarity)」と位置づけながら、「アサビーヤ」論を批判した。彼によれば、国家形成を可能とする原動力は、親族関係、リネッジ、部族集団など「アサビーヤ」に相当する部族的連帯に基づいてはいなかったという。

彼は、「国家形成を導く征服運動」は、宗教的リーダーシップと、非宗教的な軍事的権威(none-religious warrior authority)の二種類のうちのどちらかの政治的リーダーシップに率いられていたという。宗教的リーダーシップが中心となつて行われた国家形成の事例としては、預言者ムハンマドによるウンマの形成、ムラービド朝やムワッヒド朝などの北アフリカの王朝、イランのサファビー朝などが取り上げられている。また、軍事的権威の事例としては、カラ・ハーン朝、オスマン帝国、セルジューク朝などをあげている[Lapidus 1991: 28-34]。

ラビダスによるアサビーヤの定義が妥当であるのか否かは、本稿で論じきれものではないが、征服活動を可能とする連帯意識の形成については、「部族的連帯」、「宗教的連帯」、「軍事的権威」の3パターンに関する問題提起が行われたことを踏まえておくことが重要であろう。ただし、現在から歴史を遡るのではなく、過去から現在を見る視点に立つなら、征服活動の成功が必ずしも国家の形成をもたらさないという歴史研究の知見を踏まえておくべきであろう。アラビア半島の歴史でも、征服活動の成功が必ずしも国家の成立には達しなかった点は同様である。

征服説の他に、商業資本の発生がイスラーム帝国の形成の原動力となったという研究が現れている。M・イブラーヒームは、7世紀のイスラームの発生からアラブの大征服という歴史的経過が発生した要因として、宗教的情熱や教義解釈の上の対立を説明要因とする視点や、飢えのために襲撃を常とした遊牧部族民によって引き起こされたという説を退ける。彼は、商人資本(merchant capital)が支配的な社会勢力になっていたことが、イスラームが発生したり、アラブの大征服が行われた社会的背景になったという説を提示している。

彼によると、イスラームが発生する以前に、アラビア半島では商業が繁栄し始めており、その結果、富裕な商人階層が生れ、貧富の格差が発生し始めることとなった。このような社会変化の結果、部族的結合が弱められることになっ

たが、部族は新たに発生した社会問題や社会紛争を解決することができなかった。預言者ムハンマドによって広められたイスラームは、社会の最下層の人々を助けたり、頻発する紛争や戦争を終わらせるなどの社会問題の処方箋となる一方、商人には私有財産や交易路を保護することによって、莫大な利益を獲得できる状況をもたらすことになった。アラブの大征服は、商業市場を拡大させることになり、征服した各地に形成された都市は、部族社会には見られない社会構造であった[Ibrahim 1990: 86, 95, 103]etc.。

ただし、イブラーヒームによると、商人が政策を左右する社会勢力として存在できたのは、ウマイヤ朝の成立を経て、アッバース朝のカリフ・ムタワッキルの時代までだったという。その後は、次第に大土地所有者や軍人が社会の最大勢力となるイクター制の時代に移行したからであるという[Ibrahim 1990: 196]。

S・アミーンは、アラブの前資本主義的な生産様式として、「遠隔地貿易-貢納的生産様式」を提唱した。彼によれば、貢納(tribute)という吸い上げ形態で村落共同体を搾取する社会的・政治的装置が、前資本主義的階級社会の特徴であった。前資本主義社会は、共同体に組織された農民階級と、農民から貢納を取り立てる支配階級に分かれる[アミン 1983: 7, 9]。そして、(イ)共同体的、または貢納的生産様式の支配、(ロ)限定された地域における単純小商品関係の存在、(ハ)遠隔地貿易の存在、によって特徴づけられるという[アミン 1983: 11]。中でもアラブ世界では、主要都市が繁栄を誇るために必要とされた余剰は、通常、その地域の農民搾取によってもたらされたのではなく、遠隔地貿易という仲介機能の独占的利益からもたらされていた。このような商業構成体の存在は、イスラームの大征服の時代から第一次世界大戦まで、東アラブ社会の特徴となっていたという[アミン 1983: 34]。

アミーンは、農民、支配階級、遠隔地貿易に従事する商人を主要な社会集団としてとりあげて、「遠隔地貿易-貢納的生産様式」を提唱した。イブラーヒー

ムが論ずるように商人階層がアッバース朝までしか政策を左右する社会勢力とならなかったのか、アミーンが論ずるように「遠隔地貿易-貢納的生産様式」が東アラブで第一次世界大戦まで支配的な生産様式だったのかは、本稿では議論の対象とはならないが、18世紀以降のアラビア半島の国家形成における商人の役割について、検証されるべき多くの論点が提示されたと言えるであろう。

次号以降の本研究では、以上に検討された諸理論が、サウディアラビアの国家形成と、どのような点で共通し、相違点をもつのか、検討が始められる。

IV 資料

現在では、一定の信頼性を保ちつつ、サウディアラビアの国家形成(政治社会構造の変容)に関するモデルを構築したり、アクターの形成や役割に関して評価するために、十分な史料が収集できる状況になっていると考えられる。バシリエフ、ヘルムズ、コスティナー⁽¹²⁾らは、大きな貢献を果たしてきたが、まだ彼らは、定住民社会に関する史料を得ていなかった。1980年代から1990年代までのサウディアラビア人研究者たちは、現地人である強みを発揮し始め、まだ活用されていなかった年代記を収集し、丹念に整理する作業を行った。定住民社会に関する史料の発掘と活用では、[Juhany 1983]が画期的であり、[Nuaim 1987]や[Freih 1990]が成果を拡大した。

本研究では、出版物、英国記録、年代記などを使用した。ただし、本研究は、一次史料だけに依拠したのではなく、有用な先行研究は、資料として批判的に活用することとした。確認されている一次史料の全てを利用することだけで研究をまとめることは、率直なところ、筆者の収集能力と時間的な問題などのために適わなかったことであるし、また、本稿の方法論や目的を鑑みれば必ずしも現段階で求められることでもないと判断した。一次史料のさらなる活用は、

次の段階の研究作業の目標に相応しいと判断した。本稿のために使用された資料は、以下のようなものがある。

従来から、第一次サ우드朝と第二次サ우드朝に関する年代記の中で、代表的なものとされるのは、[الحنبلي 1982]、[عيسى بن عيسى 1966]、[بن غنام 1983]などである。本研究で利用した 18 世紀から 19 世紀の欧米人旅行家の著作は、[ブランド 1998]、[Wallin 1979]、[Palgrave 1985]、[Pelly 1866]、[Burckhardt 1992]、[Doughty 1990]である。また、[Ward 1983]は、ハーイル(حائل)を訪問した欧米人旅行家による記述を収集した一冊である。ただし、[Palgrave 1985]で記される人口や金額などの数値は、他の数値とかけ離れており、慎重に評価される必要がある。建国期に関する歴史家や旅行家による記録では、[الريحاني 1988]、[Rihani 1928]、[آل عبد القادر 1972]、[المختار 1956]などが代表的である。以上の史料は、定住民社会と遊牧民社会の変容に関する内容をふんだんに含んでいる。

定住民社会に関する先行研究としては、すでに[Juhany 1983]、[Nuaim 1987]、[Freih 1990]をあげているが、それ以外では、[السويداء 1993]、[آل الفليح 1997/8]、[الجزالين 1992]、[العجلاني 1993a]、[العجلاني 1993b]、[العجلاني 1993c]、[العجلاني 1993d]、[السلمان 1999]などがあげられる。また、建築学的な都市研究であるブライダの発展に関する[البري 1986]を資料として参照した。

ウラマーに関する資料では、本研究では十分に検証したわけではないが、[بن عبد الوهاب 1980]が「シャイフ」の著作や書簡などの全集である。ウラマー名鑑は、[البسام 1974]と[آل الشيخ 1962]が出版されている。

商人に関しては、[Field 1985]がよく知られた著作である。また、[Juhany 1983]と[Nuaim 1987]が新史料を活用しているが、ウラマー名鑑や各定住地に関する歴史の中に記されている。旅行家たちの記録は重要であり、英国記録の中では政治情勢に関わりを持った場合は記録されていた。

アブドルアズィーズの家臣による回想録では、[Wahba 1964]、[الزركلي 1992]、[Almana 1980]、[حمزة 1933]、[حمزة 1968]などを資料とした。サ우드家の家

臣に関しては、[أبراس 1995]や[أبادة 1987]といった研究も利用した。建国期を体験した人々の証言は、[السبيت 1994]や[السبيت 1990]などのほか、[Habib 1978]や[Nuaim 1987]に収集されていた。また、ナジュド人のスライマーン・ダヒールによってイラクで出版されたالعرب لغة紙を収録した[عجيل1982]も資料とした。イフワーン運動に関しては、従来からサウディアラビア政府発行の公式新聞أم القرىが重要な資料とされている。また、[فتح 1923]が貴重な資料の一つとされているが、信頼性には十分に注意すべき点が見られる。

サウディアラビアの行政機構の制度的な発展に関しては、[العنبي 1993]が最も多くの政府公式文書を使用した最新かつほぼ唯一の研究であり、これを主な資料とした。

また、建国期のアラビア半島の情勢に関しては、英国記録も有用である。既出版物として刊行されたものも資料として利用した。[Lorimer 1915]は、情報に誤りも含まれているとはいえ、19世紀末から20世紀初めのアラビア半島に関する重要な基本資料である。カタールでアラビア語への翻訳が出版された。また、ロンドンのForeign OfficeやIndia Office、St. Antony Collegeに所蔵されているペーパーを参照し、資料とした。

出版されている英国の外交官や軍人によって書かれた回想録、また、旅行家やジャーナリストによる出版物では、[Dickson 1936]、[Dickson 1956]、[Musil 1928a]、[Philby 1922]、[Philby 1928]、[Philby 1952]、[Glubb 1960]などを参照した。Dicksonのほうが、Philbyよりも、アラビア半島の社会構造に関して多くを書き残した。

すでに先行研究でも紹介した人類学的なアプローチに基づくフィールドワーク調査は、部族の社会構造や定住化の過程に関して多くのデータを提供されている。前稿で言及したもの以外では、[الغامدي 1990]と[Vidal 1976]などを資料とした。部族に関しては、[حري 1994]、[الحقيل 1994]、[الطيب 1997]、[الجابس 1980]を主要な資料とした。

最後に、本稿の地名の転写は、主として、[عبدو1995]に記載された母音記号に
依拠する。

註

(1)「初期国家(early state)」や「原始国家(primitive state)」の国家形成
を整理したものでは、次のものがある[植木 1996a], [Service 1978], [クレ
ーダー 1972: 23-62]。また、C・ティリーは、国民国家の形成に関する主要な理論
モデルを4つに分類している。なおティリーは、国民国家の定義を行っている
が、その定義は初期国家論者の国家の定義と類似している[植木 1996a: 38,
fn. 37]。

(2)[エンゲルス 1999]; 以上のまとめは、以下を参考としながら行った。[植木
1996b]; [松木 1996]。

(3)エンゲルスの理論への批判は膨大であり、全てをフォローしきことは難し
いが、主要な論点としては、以下があげられるだろう。1. 階級闘争を論じたが、
部族社会など、親族を主要な政治集団とする社会における国家形成について議
論しなかった、2. アジア的生産様式の議論が、単線の発展段階説になっている、
3. 征服活動によって国家が形成されるという、いわゆる征服説に関して十分に
検討されていない、4. 血縁社会から地縁社会への単線的な発展を仮定している、
5. 下部構造が上部構造を規定するための要因として強調されすぎている、など。

(4) また、両者の比較に関しては、植木武が紹介したT・アールによるまとめが
ある[植木武 1996a: 29-30]。

(5) サーヴィスがマルクス主義的国家形成論の批判されるべき点としてあげた
のは、以下の4点。

1. 技術進歩が、「原始社会」の生産性を向上させたという論点。
2. 交易が、消費のための生産ではなく、「商品生産」をもたらすという論点。

3. 「商品生産」が、富裕者と貧者の階級分化をもたらしたという論点。

4. 「富裕者を防衛するため」の強制力を備えた国家が出現したという論点 [Service 1975: 269]。サービスが論ずるように、技術革新、商品生産、階級形成が、国家形成の普遍的な過程であると安易に一般化することはできないだろう。

(6) その他の「紛争理論」については、[植木 1996b: 129-143], [Service 1978: 21-27]などを参照。

(7) 征服理論の研究史に関しては、[植木 1996b: 144-159], [クレイダー 1972: 97-100]などを参照。

(8) 文化伝播主義とは、交易によって、ある革新的な「中心」から新しいアイデアや物が「周縁」へと伝播することにより、文明が成立するという立場である [西村 1996: 173]。他方、システム論は、どの社会活動も社会全体の中の一要素として、全体あるいは他の要素との関係について論じられるべきであるという立場から、交易を社会全体の中で理解しようとする理論志向をもつ。システムが発展する場合には、それに伴って生ずる不安定さを制御しようとするシステムを発展させる、という立場から、商業活動を制御する要因に着目する [西村 1996: 205-206]。

(9) 「中央政府なき社会」は、階級、地位、富における分化が見られない社会であり、ヌエルに代表される分節政治システムによって秩序を維持していると考えられた。他方、「国家」は、中央政府によって、行政、司法、軍事機構などにより統治する政治組織であるとされた [Fortes 1940: 5-23]。

(10) また、モデルとなった生物進化論とは、「有機体とその内的複雑性を増大させる傾向、この複雑性を統合し再生産するための特定機関の分化」などであるという [ゴドリエ 1976: 158]。

(11) 新進化論は、文化の伝播に関する「単系的進化論」や「多系的進化論」([スチュワード 1979: 9-29]参照)を退け、進化は、「一般進化」と「特殊進化」

に分類されるという理論を展開した。「一般進化」とは、古い形態から新しい形態が多様に生まれていくことであり、「特殊進化」とは低い形態から高い形態が生じることであるという[サーリンズ 1976: 7-8, 30-31]。おそらく、このような理論を構築するためには、できるだけ多くの事例をとりあげる必要があったのであろうと考えられる。「一般進化」論と「特殊進化」論を批判したものには、両者における部族の定義を批判した[ゴドリエ 1976: 143-144]がある。

(12) バシリエフは、[Goldup 1971]の成果をもとに、さらに多くの書籍や記事を収集し、解題を記した[بسيليف 1986:3-21]。ヘルムズとコスティナーは、英国記録を活用する点で貢献した。

参考文献

- الشيخ، عبد الرحمن بن عبد اللطيف بن عبد الله. 1962. *مشاهير العلماء نجد وغيرهم*. الرياض: دار اليمامة للبحث و الترجمة و النشر.
- آل عبد القادر، محمد بن عبد الله بن عبد المحسن. 1972. *تفحة المستفيد بتاريخ الأسماء في القديم و الجديد*. الأحساء: مكتبة الأسماء للأهلية.
- آل الفليح، عبد المحسن بن محمد. 1997/8. *رغبة: مثال القرية النجدية*. الرياض: مطابع الدلتا.
- أبادة، فاروق عثمان. 1987. *حافظ الوهبة: مستشار شخصي للملك عبد العزيز آل سعود 1933-1953*. الإسكندرية: د.ط.
- أبوراس، عبد الله بن سعيد. 1995. *عبد العزيز بن إبراهيم آل إبراهيم: أمير عسير و الطائف و المدينة المنورة و عضو مجلس الوكلاء في مرحلة التأسيس المملكة*. الرياض: مطابع العسير.
- البسام، عبد الله بن عبد الرحمن بن صالح. 1974. *علماء نجد خلال ستة القرون*. مكة: مكتبة و مطبعة النهضة الحديثة.
- بسليفي، أ. 1986. *تاريخ مملكة العربية السعودية*. مسكو. دار التقدم.
- بن عبد الوهاب، محمد. 1980. *مألفات شيخ الإمام محمد بن عبد الوهاب*. الرياض: جامعة الإمام محمد بن سعود الإسلامية.
- بن عيسى، إبراهيم بن صالح. 1966. *تاريخ بعض الحوادث الواقعية في نجد و وفیات*. دار اليمامة للبحث و الترجمة.
- بن غنام، حسين. 1983. *تاريخ نجد: روضة الأفكار و الأفهام لمرتاد حال الإمام و تعداد غزوات زوي الإسلام*. الرياض: دار الشروق.
- الجاسر، حمد. 1980. *قبائل مملكة العربية السعودية*. الرياض: دار اليمامة. 2م.
- الجزالين، عبد الله بن عبد العزيز آل مفلح. 1992. *تاريخ الأفعلاج و حضارتها*. الرياض: مطابع سفير.
- حربي، فائز بن موسى البدراني. 1994. *من أخبار قبائل في نجد: خلال الفترة من 1445-1785*. 1م. الرياض: دار البدراني للنشر و التوزيع.
- الحقيل، حمد بن إبراهيم بن عبد الله. 1994. *كنز الأنساب و مجمعة الأداب*. الرياض: مطابع الجاسر. ط5.

- حمزة، فؤاد. 1933. قلب جزيرة العرب. القاهرة: مطبعة السلفية.
- حمزة، فؤاد. 1968. البلاد العربية السعودية. الرياض: مكتبة النشر الحديثة.
- الحنبلي، عثمان بن عبد الله بن بشر النجدي. 1982. عنوان المجد في تاريخ نجد. الرياض: دار الملك عبد العزيز.
- الربري، محمد بن صالح العبد الله. 1986. بريدة: نموها الحضري وعلاقاتها الإقليمية. ج2. الرياض: دار الكتاب السعودي.
- الريحاني، أمين. 1988. تاريخ نجد وملحقاته وسيرة عبد العزيز بن عبد الرحمن آل فيصل آل سعود، ملك الحجاز ونجد وملحقاتهما. بيروت: دار الجليل. ط6.
- الزركلي، خير الدين. 1992. شبه الجزيرة في الملك عبد العزيز. ط5. بيروت: دار العلم للملايين.
- السيب، عبد الرحمن بن سبيت. 1990. رجال ونكريات مع عبد العزيز. الرياض: الحرس الوطني.
- السيب، عبد الرحمن بن سبيت. 1994. كنت مع عبد العزيز. الرياض: الحرس الوطني.
- السلمان، محمد بن عبد الله. 1999. الأحوال السياسية في القصيم في عهد دولة السعودية الثانية 1863-1891. عنيزة: المطابع الوطنية للأفست.
- السويداء، عبد الرحمن بن زيد. 1993. 1000 سنة غامدة من تاريخ نجد. م1. الرياض: دار السويداء للنشر والتوزيع.
- صابر، محي الدين. 1986. "التوطين ومشروعاته". صابر، محي الدين و مليكة، لوليس كامل. الببر و البداوة: مفاهيم و مناهج. بيروت: مكتبة العصرية.
- صابر، محي الدين و مليكة، لوليس كامل. 1986. الببر و البداوة: مفاهيم و مناهج. بيروت: مكتبة العصرية.
- الطيب، محمد سليمان. 1997. القبائل العربية: بحوث ميدانية وتاريخية. نصر: دار الفكر العربي. م5.
- عبده، أسعد سليمان. 1995. معجم الأسماء الجغرافية. الرياض: مكتبة المدني.
- العتيبي، إبراهيم بن عويض الثعلي. 1993. تنظيمات الدولة في عهد الملك عبد العزيز 1924-1953. الرياض: مكتبة العبيكان.
- العجلاني، منير. 1993a. تاريخ البلاد العربية السعودية. ج1. دولة السعودية الأولى. م1. الرياض: دار الشبل.
- العجلاني، منير. 1993b. تاريخ البلاد العربية السعودية. ج1. دولة السعودية الأولى. م2. الرياض: دار الشبل.
- العجلاني، منير. 1993c. تاريخ البلاد العربية السعودية. ج1. دولة السعودية الأولى. م3. الرياض: دار الشبل.
- العجلاني، منير. 1993d. تاريخ البلاد العربية السعودية. ج1. دولة السعودية الأولى. م4. الرياض: دار الشبل.

عجيل, محسن غياض. 1982. *الصحفي, السياسي, المؤرخ النجدي سليمان بن صالح الدخيل*. بغداد: جامعة البصرة.

فتيح, محمد مغيربي. 1923. *وهاية اليوم: فرقة الإخوان نجد*. د.م.

الغامدي, سعيد صالح. 1990. *بناء القبائل و تحضر في المملكة العربية السعودية*. الإسكندرية: جامعة الإسكندرية.

لوريمر, ج.ج. د.ت. *لليل الخليج*. القسم الجغرافي. ج.2. بترجمة مكتبة صاحب السموه أمير دولة قطر. طبعة جديدة. د.م.

المختار, صلاح الدين. 1956. *تاريخ المملكة العربية السعودية في ماضيها و حاضرها*. ج.2. بيروت. دار مكتبة الحياة.

Almana, Mohammed. 1980. *Arabia Unified*. London: Hutchinson Benham.

Altorki, Saraya and Cole, D. 1989. *Arabian Oasis City: the Transformation of 'Unayzah*. Austin: University of Texas Press.

アミン, サミール. 1983. 西川潤訳『不均等発展: 周辺資本主義の社会構成体に関する試論』東洋経済新報社.

Anderson, Lisa. 1986. *Tribe and State Formation in Tunisia and Libya, 1830-1980*. Princeton: Princeton University Press.

Anderson, Lisa. 1991a. "Tribe and State: Libyan Anomalies." In Khory, P. S., & Kostiner, J. *Tribes and State Formation in the Middle East*. London: I. B. Tauris.

Anderson, Lisa. 1991b. "Absolutism and the Resilience of Monarchy in the Middle East." *Political Science Quarterly*. 106(1):1-15.

ブランド, レディ・アン. 1998. 田隅恒生訳『遍歴のアラビア: ベドウィン揺籃の地を訪ねて』法政大学出版社.

Burckhardt, John Lewis. 1992. *The Bedouins and Wahhabys*. London: Garnet Publishing Co. 2 vols.

- Childe, Gordon. 1950. "The Urban Revolution." *Town Planning Review* 21:3-17.
- Cohen, R. & Service, E.R. 1978. *Origin of the State: the Anthropology of Political Evolution*. Philadelphia, Institute for the Study of Human Issues.
- Cohen, Ronald & Toland, Jusith D. 1988. *State Formation and Political Legitimacy*. New Brunswick: Transaction Books.
- コウル, D.P. 1975. 『遊牧の民』片倉もとこ訳. 社会思想社.
- Cole, Donald P. 1982. "Tribal and Non-Tribal Structures among the Bedouin of Saudi Arabia." *al-Abhath* 30:77-93.
- Dickson, H. R. P. 1936. *The Arab of the Desert*. London: George Allen and Unwin.
- Dickson, H. R. P. 1956. *Kuwait and Her Neighbors*. London: George Allen and Unwin.
- Doughty, C. M. 1990. *Travels in Arabia Deserta*. Delhi: Today Offset Printers. 2 vols.
- エンゲルス. 1999. 土屋保男訳『家族、私有財産および国家の起源』新日本出版社.
- Field, M. 1985. *The Merchants: The Big Business Families of Saudi Arabia and the Gulf States*. New York: Overlook Press.
- Fortes, M. and Evans-Prichard, E.E. 1940. *African Political Systems*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Fried, Morton. 1967. *The Evolution of Political Society*. New York: Random House.
- Glubb, Sir J. Bagot. 1960. *Arab of the Desert*. London: Hodder and Stington.
- ゴドリエ, モーリス. 1976. 山内昶訳『人類学の地平と針路』紀伊国屋書店.

- Goldberg, Jacob. 1986. *The Foreign Policy of Saudi Arabia*. Cambridge: Harvard University.
- Goldbup, Lawrence P. 1971. *Saudi Arabia: 1902-1932: The Development of the Wahhabi Society*. Ph.D. Dissertation, University of California.
- Habib, John S. 1978. *Ibn Sa'ud's Warriors of Islam: The Ikhwan of Najd and Their Role in the Creation of the Saudi Kingdom, 1910-1930*. Leiden: J. S. Brill.
- Helms, Christine M. 1981. *The Cohesion of Saudi Arabia: Evolution of Political Identity*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- Hogarth, David George. 1917. *Hejaz before World War I*. Cambridge: The Oleander Press. 2nd ed. Reprinted in 1978.
- イブン=ハルドウン. 1979. 森本公誠訳『歴史序説』岩波書店. vol. 1.
- Ibrahim, Mahmood. 1990. *Merchant Capital and Islam*. Austin: University of Texas Press.
- 今田高俊. 1998. 「階層」『政治学事典』.
- Katakura, Motoko. 1977. *Bedouin Village*. Tokyo: Tokyo University Press.
- 片倉もとこ. 1992. 「アラブ」『事典 イスラームの都市性』亜紀書房:203-5.
- Khory, Philip S. & Kostiner, Joseph. *Tribes and State Formation in the Middle East*. London: I. B. Tauris.
- クレーダー, L. 編. 1972. 吉田楨吾・丸山孝一訳『国家の形成』. 鹿島研究所出版会.
- Lapidus, Ira M. 1991. "Tribes and State Formation in Islamic History." In Khory, P. S., & Kostiner, J. *Tribes and State Formation in the Middle East*. London: I. B. Tauris:25-48.
- Lorimer, J. B. 1915. *Gazetteer of the Persian Gulf*. Calcutta: Superintendent Government Printing.

- ローウィ, R.H. 1973. 古賀英三郎訳『国家の起源』法政大学出版界.
- マンフォード. 1969. 生田勉訳『歴史の都市、明日の都市』新潮社.
- 松木武彦. 1996. 「日本列島の国家形成」植木武編『国家の形成：人類学、考古学からのアプローチ』三一書房：233-276.
- 宮地美江子. 1987. 「イスラーム伝統の二側面」伊藤亜人、関本照夫、船曳建夫編『現代の社会人類学 3』139-170.
- Musil, Alois. 1928a. *Northern Negd*. New York: American Geographical Society.
- Musil, Alois. 1928b. *The Manners and Customs of the Rwala Bedouins*. New York: American Geographical Society.
- Musil, Alois. 1930. *In the Arabian Desert*. New York: Horace Liveright.
- 西村正雄. 1996. 「長距離交易モデル」植木武編『国家の形成：人類学、考古学からのアプローチ』三一書房：9-39.
- 二宮宏之. 1979. 「フランス絶対王政の統治構造」吉岡照彦、成瀬治編『近代国家形成の諸問題』木鐸社：183-223.
- Nuaim, Mishary, Abdalrahman al-. 1987. *State Building in a Non-Capitalist Social Formation: the Dialectics of Two Modes of Production and the Role of the Merchant Class, Saudi Arabia, 1902-1932*. Ph.D. dissertation, University of California.
- Palgrave, W. G. 1985. *Personal Narrative of a Year's Journey through Central Arabia 1862-1863*. London: Darf Publishers Ltd. 6th ed.
- Pelly, Lewis, 1866. *A Journey to Riyadh*. Byculla: Education's Society's Press.
- Philby, H. St. John B. 1922. *Heart of Arabia*. London: Constable and Company Ltd. 2 vols.
- Philby, H. St. John B. 1928. *Arabia of the Wahhabis*. London: Constable

and Company Ltd.

Rihani, Ameen. 1928. *Ibn Sa'oud of Arabia: His People and His Land*.

London: Constable & Co Ltd.

サーリンズ, M. & サーヴィス, E. 1976. 山田隆治訳『進化と文化』新泉社.

Service, Elman R. 1975. *Origins of the State and Civilization: The Process of Cultural Evolution*. New York: W.W. Norton & Co.

Service, Elman R. 1978. "Classical and Modern Theories of the Origins of Government." in Cohen, R. & Service, E. R. *Origin of the State: the Anthropology of Political Evolution*. Philadelphia: Institute for the Study of Human Issues: 21-34.

サーヴィス, E. R. 1979. 松園万亀雄訳『未開の社会組織』弘文堂.

Shamekh, Ahmed A. 1975. *Spatial Patterns of Bedouin Settlement in al-Qasim Region, Saudi Arabia*. Ph.D. Dissertation, Kentucky University.

嶋田義仁. 1995. 『牧畜イスラーム国家の人類学: サヴァンナの富と権力と救済』世界思想社.

店田廣文. 2002. 「都市」大塚和夫ほか『イスラーム辞典』岩波書店: 678-681.

植木武. 1996a 「初期国家の理論」植木武編『国家の形成: 人類学、考古学のアプローチ』三一書房: 9-39.

植木武. 1996b 「闘争・戦争モデル」植木武編『国家の形成: 人類学、考古学からのアプローチ』三一書房: 129-167.

Vidal, F.S. 1976. "Mutayr: a Tribe of Saudi Arabian Pastoral Nomads." D. E. Hunter & P. Whitten eds. *The Study of Anthropology*. New York: Harper & Row.

Wahba, Sheikh Hafiz. 1964. *Arabian Days*. London: Arthur Baker Limited.

Wallin, G. A. 1979. *Travels in Arabia 1845- 1848*. Cambridge: The Oleander

Press.

Ward, Philip. 1983. *Ha'il: Oasis City of Saudi Arabia*. Cambridge:
The Oleander Press.

Weber, Max. 1978. *Economy and Society: an Outline of Interpretive
Sociology*. ed. by Guenther Roth and Claus Wittich. Los Angeles:
University of California Press. vol.2.

Wright, H.T. 1977. "Recent Research on the Origin of the State." Annual
Review of Anthropology 6: 379-397.

付記

本稿は、博士論文『サウディアラビア王国の国家形成と支配基盤：都市民と
遊牧部族民の政治的役割の分析にむけて』（2002 年東北大学国際文化研究科受
理）の第2章第4節から第7節までを再構成・加筆修正したものである。

（なかむら・さとる 神戸大学大学院国際文化学研究科・准教授
中東政治）

『近代』 101 号 (2009.5) 89*-127*

「サウディアラビア王国の国家形成と支配基盤：方

法論的検討」 中村覚

訂正

(1) P.94, 4 行目, 「親進化論」を「新進化論」に訂正。

(2) 文献リストに以下を追加。

Fortes, M. and Evance-Prichard, E.E.. 1940.

African Political Systems. London:

Routledge and Kegan Paul.